

日本看護歴史学会

會報

日本看護歴史学会

第 26 号

1997年 2 月 15 日

看護の大学化が進む中で

依田和美

今、看護教育の大学化が進んでいる。平成二年までは全国で看護大学が一一校であったが、平成四年に三校、平成五年に七校、平成六年に九校、平成七年には一〇校、平成八年に六校が設立され、そして平成九年に七校が設置される予定であり、全国の看護大学の数は平成九年に五三校となる。看護の短期大学の数も六〇校余りとなり、長年にわたり各種学校、また専修学校での劣悪な教育環境の下でしいたげられてきた看護学生にもやっ

と「学校教育法」第一条校の教育研究条件の整ったキャンパスが提供され始めた。

私は昭和三〇年代に看護学校を卒業し、看護婦として勤務したのち、昭和四二年に大阪大学医療技

術短期大学の助手になり、現在は大阪府立看護大学医療技術短期大学部に籍をおいている。振り返れば三〇年という長い歳月を看護短期大学の教員として看護教育に携わってきたことになる。

短期大学の教員として、他の分野の教員とともに教育にたずさわる中で、看護教育の遅れを痛感し、なぜこのように看護の教育が他の後塵を拝することになったのかという疑問をもつようになった。そもそも私が看護歴史に関心を抱いたのは、この辺の問題意識からであった。

戦後五〇年を迎えて、看護教育の流れはやっと学校教育制度の本流に太い流れとなって合流した。しかも変化は、冒頭で説明したよ

うにここ五・六年の間に起こった。私が勤務する大阪府においても、平成六年に看護大学が設立されることになり、その際旧看護短期大学に既存の府立専修学校を整理統合し医療技術短期大学部として改組・移転した。

平成六年四月、新築なった近代的な素晴らしい校舎を目の当たりにして大いに感動をおぼえた。それまで勤務した短期大学は、いずれも古い建物を利用したものであり、その時の感慨は看護教育にもこれ程多額の財政投資が行われる時代になったのかという思いであった。同じように他の府県でも次々と素晴らしい看護大学や短期大学の建物が建設されている。

この変化は高齢化社会の到来、また国民医療費の高騰などにより、看護職への期待が一举に増大した結果によるといわれているが、このように急激な変化になるうとは看護界の誰が予測したであろうか。看護職の一員として喜ばしく思う反面、これが本当に私達の希望と力によって実現したものであるのかという半信半疑の思いもなくはない。

看護大学の設置が急速に押し進められる中で、当然ながら未曾有の看護教員不足が引き起こされ、

看護教育界では今やみるに耐えない教員の引き抜き合戦があらちちらで繰り広げられている始末である。

中でも既存の看護短期大学がその影響をまともに受けているのではないだろうか。私もこの凄まじいばかりの看護大学設立ラッシュの真っ只中で右往左往しながら、看護短期大学の運営において毎日苦しい決断を迫られ続けている。

急激な変化の時代において、その中で当事者たちがどのように判断し、またいかに対処するかが問われ、それによって主体的な歴史が作られて行く。これまでの日本の看護職の歴史を振り返る時、医師をはじめとする看護職以外の人々の意向に左右されることが強かったが、今度こそ看護職が主体となって堅実な質的發展の歴史を導いていきたいと思う。

看護歴史学会の会員として、私たちは看護の歴史を学び、研究するだけではなく、今看護の歴史を身をもって創造しつつあるという時代認識に立って、それぞれの立場での熟慮に富んだ発言と行動が求められていると思う。

